



光市立光総合病院  
院長 桑田 憲幸

スポーツの現場でも多く見られる手のひらや手首のケガですが、部位によっては通常のレントゲンの撮影では見つけにくい骨折があります。

今回は舟状骨骨折と有鉤骨鉤骨折の2つのけがについてご紹介します。

## 舟状骨骨折

子どもから高齢者まで転倒して手のひらを地面についた時によく起こるのが手首の関節(手関節)の骨折です。正確には前腕(うでのうち肘から手首までの部分)の骨(橈骨と尺骨)の骨折です。この骨折はスポーツの現場では良く起こります。しかし、手を激しくついて手首の痛みがあり、病院でレントゲンをとって橈骨や尺骨に明らかな骨折はないといわれたけれど、手首の痛みが続いている…。この時は「舟状骨骨折」が起こっている場合があります。

### ●原因

スポーツではラグビーやサッカーなど強い力で手をついたとき起こることが多いようです。また、体操の床や鞍馬で手首を強く背屈(手首を反らす)状態で体重がその手にかかるような演技を続けることにより疲労骨折を生じる事もあります。

### ●治療法

この骨折は通常の手関節のレントゲンでは見つけることが難しく、通常とは違う撮影法が必要で、それでもわからないときはMRI等の検査も必要となります。この骨は表面のほとんどが軟骨で覆われているため、いったん骨折するとほかの骨折と比べて治りが悪く、また痛みも強くないので、病院に行くのが遅れ、骨がつかない状態で発見されることもあります。レントゲンで骨折がずれていないときは親指を含んだギプスで少し長めの期間固定します。ずれがなくとも早くギプスでの固定をはずしたい場合は金属製の特殊な釘で固定する方法があります。ずれている場合は手術を、また骨折の治りが悪く骨がつかない場合は骨移植をして金属で固定する事が必要となります。

## 有鉤骨鉤骨折

### ●原因と症状

野球の試合でバットを振り、芯をはずした、または空振りをした、その後で手のひらのやや小指側の下の方に痛みが出てきた。握ると痛い。こういう場合は「有鉤骨鉤骨折」をしている場合があります。野球だけでなく、ゴルフやテニスなどのラケットスポーツ、また剣道などでも生じる事があります。スポーツ以外では転倒や転落、バイク事故などによって起こります。

ケガをした直後は強く握った時の痛みや握力が落ちたりしますが、時間が経ってくると手のひら小指側の違和感や鈍い痛みなど、漠然とした症状になっていきますので、病院に行くのが遅れることが多いようです。古い骨折になると小指を曲げるスジが切れることもあります。

### ●治療法

この骨折も通常のリントゲンでは見つけることが難しく特別な方向でのレントゲン撮影を行うか、CT検査が必要となることが多いです。レントゲンでずれがなく、古い骨折でなければギプスで長め(6~8週)に固定しますが、骨がつきにくい、またはつかないことがあります。手術では金属で固定する場合と折れた先の部分の骨を取り去る(摘出する)方法があり、患者さんの背景(仕事の内容、スポーツ復帰等)や、ずれの程度、折れた場所により決めていきますが、早期に仕事やスポーツに復帰したい場合は摘出するほうが多いようです。

